

乳幼児の発達を促す遊び

—遊びの中で育まれる10の姿—

Play that promotes the development of infants -Ten ways to be nurtured through play-

松尾裕美・阿南寿美子*

Hiromi Matsuo・Sumiko Anami

I. はじめに

乳幼児期は特に心身の発達が著しい。それとともにその後の人格を形成する基礎となる時期でもある。乳幼児期は身近な人との触れ合いにより信頼関係を築くことが最も重要であり、それを心の支えにして徐々に自分の世界を広げていく。これらの育ちを支え、より望ましい発達を援助するために、幼稚園や保育所、幼保連携型認定こども園においては、それぞれの園の保育方針や教育方針に基づいて、その発達を支え、成長を促すことができるように計画を立てる。保育者はその計画に基づいて環境を構成し、状況に応じて環境の再構成を行いながら子どもの遊びが豊かになるように援助する。子どもは保育者の援助のもとで遊びや生活を中心とした活動を行っているのである。遊びの中で子どもはコミュニケーション能力や規範意識など、様々な能力を身につけていく。今井¹⁾は、子どもは夢中になって活動しているときに最大限自己発揮し、強くなる～(中略)～それが子どもたちを育てる原動力である、と述べている。

感覚運動期と言われる0,1歳児は巧緻性が備わり、モノをつかむことができるようになると手に取ったモノを舐める行為がみられる。舐めることによってモノ素材や感覚などを学んでいくことになる。初めは偶然に触れたものを手に取り舐めるが、だんだんと自分が興味を持ったモノを手にとったり、難しいときは周り

の大人に働きかけ手に入れようとする。こうして手にしたモノは、例えばタオルを布団に見立てたり、四角い箱を車に見立てたりする。見立てができるようになると、ふり遊びやごっこ遊びへと発展し、大人の仲立ちによって友達と少しずつ関わりを持ち始めた子どもたちは、気の合う友達と遊び始めるようになる。村野²⁾は、4,5歳児を対象として、自分達でルールを工夫し継続する集団遊びについて分析しており、その中で、「幼児たちは、他の幼児たちと遊ぶ中で共通の目的が生まれ、工夫したり協力したりする楽しさを味わいながら、段階を追ってより大きな集団での遊びに発展していく」と述べており、この成長は発達の最近接領域に教師が適切な環境構成に働きかけを行ってきたという条件下で獲得してきたとしている。集団で遊ぶことによる育ちは、まず個々の遊びが充実することが前提にあると考えられる。個々が主体的に遊び、充実していることを基盤に友達同士で対話が生まれ、互いのありのままを受け入れ合い、良さや発見を取り入れたり試したりする中で共通の目的を友達と持つことで『友達と遊ぶ』という段階から『仲間同士で遊ぶ』という段階へ変容していく³⁾のである。

2017年に改訂された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、乳幼児教育においては遊びを通して学びの基礎を身につけるということが明確に示された。本論では、個人で行われる遊びと集団で行われる遊びに焦点をあて、それぞれの遊びについて「幼児期の終わりまでに育つ

* 西南女学院大学短期大学部保育科

てほしい姿」がどのように関連しているのか考察することを目的とする。

Ⅱ. 保育における遊びについて

2017（平成29）年告示第5次改訂が行われた「幼稚園教育要領」は1989（平成元）年第2次改訂から変わった点として、第2章、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が加わったところである。資質・能力を一体的に育むように努めることを念頭に置いて改訂がなされている。

（1）豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分ったりできるようになったりする「知識及び技能の基礎」、（2）気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」、（3）心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

1. 健康な心と体
2. 自立心
3. 協同性
4. 道徳性・規範意識の芽生え
5. 社会生活との関わり
6. 思考力の芽生え
7. 自然との関わり、生命尊重
8. 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
9. 言葉による伝え合い
10. 豊かな感性と表現

これらのことを考慮しながら、保育現場における「遊び」に焦点を当ててみていく。また、保育現場である保育所、幼稚園において「遊び」とはどのような位置づけであるのか考えていく。1989（平成元）年以降、幼児の自発的な活動としての「遊び」は、心身の調和の取れた発達の基礎として、子どもにとって重要な活動と位置付けられている。それ以前の幼稚園教育要領では、1964（昭和39）年告示第1次改訂においても、遊びの重要性は掲げられているが、「遊び」は保育内容に含まれており、その多くは保育者が望ましいとする経験や体験を含めた活動を保育者が与えるとい

う側面が強い「遊び」であった。それ故、保育場面では保育者が主導して子どもたちにそれを行わせる活動が多く見受けられた。1989（平成元）年以降は、主体的に環境と関わって、子どもが生み出す活動としての「遊び」を重視している。幼稚園教育要領（2017）には、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」⁴⁾と示されており、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2017）にも同内容が示されている（幼児は乳幼児と表記されている）⁵⁾。保育所保育指針（2017）には、第1章総則に「子どもが自発的・意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」と示されている⁶⁾。いずれも子どもの「学び」や「育ち」のためには遊びを通して保育を行うことが示されていることがわかる。幼稚園教育要領解説書等では「遊び」とは、「それ自体が目的であり時が経つのも忘れて夢中になって楽しむものであり、そのなかに、発達に重要な体験が含まれている」としている⁷⁾。保育における遊びとは、子ども自身がその活動の中心にいて、子どもが主体的にその活動に関わり、現実の価値基準にとらわれることもなく自由な発想をもって行われるものであり、そしてその活動を時間も忘れて楽しむものである。そのことが乳幼児期に育みたい資質や能力等の発達を促すことにつながる。また、2017（平成29）年の改訂より、アクティブラーニングの視点を重要視し、「主体的、対話的で深い学び」の充実を図ること加えられている。

乳幼児期の遊びは、発達の状況に合わせて変化していく。遊びに対する興味が明確でない何もしていない行動に始まり、周囲に目を向け、目に入った様子から興味を持った友達の遊びなどを見て、たまに話しかけるが特に遊びを共有することはないといった傍観的な行動、一人遊び、そして近くにいる友達と同じような遊びをしているが特に交流することなく行う並行遊び、一緒に遊び役割もあるが、まだ個々のイメージにとらわれることが多く、役割や場面等の状況が流動的な連合遊び、友達のイメージを共有しながら役割を分

担したり、遊びの方向性を定めて目的に向かって遊びが進んだりする協同遊びなどがある。保育者と自分の遊びから徐々に友達と協同した遊びが展開されるようになっていく。一方、年長の子どもでも個人で遊びを行うことも多い。

Ⅲ. 集団遊び及び個人遊びについて

幼児が行う遊びを大きく分けると、「集団で行う遊び」と「個人で行う遊び」がある。

集団遊びでは、役割遊び（お母さんごっこ・お店屋さんごっこ・お家ごっこなど）が頻繁に行われている。2人以上が何かの役になりきり、その人の言動を真似たり、その役のふりをしたりしながら友達と関わる遊びである。ごっこ遊びには、役割や計画があり、また時や場所といった場面の設定により状況が変わってくる遊びである。ごっこ遊びは自分と他者との関わりにより成立する遊びであるが、5歳児になるとそれぞれの体験や経験で得た会話や動作、物事への知識をもとに遊びが構成される。そのため保育者が関わらなくても友達とイメージを共有しながら場面を創り出し、遊びを展開させることが可能になる。特に会話においては、それぞれの家庭で話されている家族間の言葉が多く発せられている。「いつてらっしゃい」、「忘れ物はない?」「お風呂入って」など生活の体験から出てくる会話が多く占める。最近のごっこ遊びでは、テレワークに関連する発話などもみられる。その遊びの中だけで通じる家族間、お店での会話は、その役独特のお決まりの会話であるが、遊びの中では、その人物になりきるところが子どもたちにとっては面白いのである。その様子からは、それぞれの家庭の様子も垣間見ることができる。

一方で家庭の中で「幼稚園ごっこ」に興じている子どもたちもいる。その会話は、幼稚園での教師の言葉遣いや動作が頻繁に出現する。元保育者としては、そちらのほうが興味深い。通常の遊びの中では、友達同士の砕けた口調を用いた会話をする子どもたちも、幼稚園ごっこ遊びの中では、教師役の子どもは標準語、子ども同士は普段通りなど、役割による言葉の使い分けが行われる。

それぞれ集団遊びにおいては、個人の体験、経験か

らその場に応じた言葉を用いて、関わる子ども同士による小さな社会である。その社会の中で、子どもたちは仲間入りをはじめとする基本的なルール他、相手の気持ち、自分の主張、動き、配慮と様々なことを学習していく。

個人で行う遊びとしては構成遊びが挙げられる。ミニカーや積み木を並べたり摘んだりする遊び、丸や四角などの枠に同じ型の玩具をはめたり落としたりする遊びなどは低年齢児によく見られる。年齢が高くなると、積み木やブロックでロボットや乗り物、建物など目的を持った玩具を作ったり、泥団子を何度も失敗しながらも工夫を凝らして作り上げたりする。低年齢児は保育者に見守られながらこれらの遊びを行うが、次第に子どもたちは自身の世界の中で集中したり、イメージを広げたりしていく。特にブロックや積み木などを使った遊びでは、自分のイメージする形を作り上げるためにどの部品を使えばよいのか、どのようにつなげていけばよいのかなど試行錯誤しながら作り上げていく。泥団子では、水の量やどこの土を使うのかなど何度も作り直す。初めのころは失敗して泣く子どもも、何度も繰り返すうちに、どうすれば固くてきれいな泥団子を作ればよいのかわかるようになり、壊れたとしてもその悔しさを次の工夫につなげることができるようになる。これらの遊びは、個人の遊びとして挙げたが、遊びながらも友達の様子をじっと見たり、友達のアイデアを真似したりと他者とのつながりは少なからずある。

以上のように集団遊びや個人の遊びにはそれぞれの楽しみや学びがある。これらの遊びの中には、今回の改定の中で示された乳幼児期に育まれる育ちの姿などが多くみられる。

そこで、次に、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と照らし合わせながら様々な遊びの中でどのような力が育まれていくのかを考えてみることにする。

(1) 集団遊び

ここでは、砂遊びと鬼ごっこや運動を伴う遊びを中心に述べていく。

①砂遊びについて

健康な心と体…これは領域の「健康」だけに限った

ことではなく、幼児が友達関係において信頼関係を築いていく中で自分のやりたいことを砂場の中でのびのびと取り組んでいく。協同性…人間関係の中で、それぞれの思いを伝えながら共通の目的の実現へと向かって遊ぶ。道徳性・規範意識…砂場の中でやってよいこと、迷惑となることなどのルールの理解が出来、考えながら行動していく。思考力の芽生え…遊びの中で工夫しながら、自分だけの考えだけではなく、友達が行っていることから物の特性や、水の流れなどにより、どのようにすればより良い方向に行くのかを深く考えていき、遊びが発展していくと考えられる。自分で考えた方法と友達考えた方法との違いを確認し自分の考えをもっと良いものにしようと考え出すことが期待できる。また、思考力の芽生えにも繋がると考えられる。砂は柔らかくさらさらしているが、少しの水を加えることにより、その固まり方は様々であり、砂山を造る時の固さ、プリンを形よく造る固さなどを習得していく。自然との関わり・生命尊重…「環境」のみだけではなく、自然の姿の変化を体験したり、それを遊びに取り入れたりしながら自然の美しさに気が付き、葉っぱ、枝、小石を使いごっこ遊びの道具となる。好奇心や探求心も旺盛になり、虫などの活動を感じながら遊びが変化していく。砂場でのごっこ遊びのだいご味である言葉による伝え合い…友達と工夫しながら、役になりきって演じることで、語彙力、表現力が育まれる小さな社会である。豊かな感性と表現…砂場での友達とのかかわりの中で、みずみずしい感性が磨かれていくことも大きな影響といえる。「おいしそう」「でっかいね」などを表現し、自分なりに演じて表現する楽しさが生まれてくるのである。砂遊びの経験は、「想像力・創造力」「情緒・社会性」の能力と関係があると考えられる。また、触ることにより「感性」を刺激したり、「科学的な」体験が増えていくことにより、小さな発見から工夫や改良などの技術的な成長へと繋がっていく。

②鬼ごっこや運動を伴う遊びについて

体を動かして遊ぶこれらの遊びの多くの場合ルールがあり、チームで力を合わせて遊ぶ場合がある。鬼ごっこを例にとると、必ず「鬼役」の子どもがいる。鬼に捕まらないように、ルールに則って、ある時は、「色付き」「氷鬼」「警察と泥棒役」に分かれて行う通称「け

いどろ」と呼ばれている遊びがある。これらの運動遊びにおいては、身体機能や身体能力の発達が期待される。また、他者との経験が増え、人間関係能力の獲得も期待できると考える。幼児が体を動かすことによる心地よさや達成感も味わえる。健康な心と体…充実感を持って遊びに参加することにより、心や体を使うことにより、満足感や達成感を味わうことが期待される。ある程度の見通しを持って遊びに夢中になることも大切である。「あー楽しかった」「やったー優勝だ!」「暑い暑い!」など、子ども自身の気持ちを伝えることにより、この遊びにより豊かな感性と表現する力も獲得することが期待できる。ここで「遊びの内容」、「共同遊び」、「協同遊び」について考えると、前者の「共同遊び」は、子ども達同士で遊び内容や場所を同じにしてかかわっていく遊びと捉え、「共同遊び」は目的が同じであり、目標に向かって協力して遊ぶ意味合いが含まれると思う。「協同遊び」においては、それぞれの子どもの思いには違いがあり、それらを言葉として表現し、思いを伝えながら違いを認識しながら工夫して遊びを発展していくのではないかと考える。「協同遊び」が成立するためには、人間関係での関りが活発になる3歳ごろから芽生えてくるのではないだろうか。他者との関りの中で「自分もやって見たい、同じことをしたい」という思いがそうさせるのではないかと考える。協同遊びの確立までには、子ども自身の自己中心的な考えによる葛藤や他者との衝突を経験する中で少しずつ低い階段を上っていきながら確立している。その時に、楽しさや力を合わせることの満足感を子どもたちは体験や経験により成長していく。

③ボールを使った遊びについて

構成メンバーによる協同遊びの中でも、チームで作戦を立て、一人一人の動きを計画していく遊びとして、サッカーやドッジボールが挙げられる。それらは、健康な心と体…心と体を十分に動かしながら、充実感や満足感をもって、自分たちのやりたいことに向かって心と体を十分働かせて取り組むことができる。また、メンバーで力を合わせることにより、道徳性・規範意識の芽生えにも当てはまる。ここでは、してよいことと、悪いことがわかり、相手の立場に立って行動することが求められる。メンバーや相手チームとの折り

合いをつけながら、自分勝手な行動や自分の考えだけの判断で行動するのではなく、自分の行動を振り返ったり、楽しく遊ぶための決まり事を守ったりすることで養われる。言葉による伝え合い…ここでは、相手の話しに耳を傾ける、メンバーの考えを注意して聞くことから養われる。また、自分の考えここでは作戦が相手に分かるように話したり、話し合ったりすることで、チームの結束が結ばれ、勝負に勝った時の達成感や満足感はメンバーとともに共有することで養われていく。

④カルタ・トランプ遊びなど

ルールのある遊びを通して知的発達を促し、社会性を培い記憶力を伸ばしていく。カルタやトランプなどを使った5～6人で行う遊びは、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚を養うことが期待できる。必要感からこれらを活用することを通して、数量・図形・文字などへの関心・感覚が一層高まる。道徳性・規範意識の芽生えも活発になり、ルールを守ることによって楽しく遊べることを学び、みんなで共有して使うものがわかり、自分の気持ちと折り合いをつけていく。ルールを意識しながら勝つためにどのようにすればよいかを考えるため、思考力の芽生えにもつながる。遊びが深まっていく中で、展開を予想したり、記憶力を発揮しながら確かめたり、振り返ったりしながら考えながら遊びに興じる。問題解決力や人との関わりの中で自分の立場や行動について試行錯誤を繰り返しながら、言葉による伝え合いを養っていると思われる。

(2) 個人遊び

個人の遊びとして、制作（製作）・造形遊び及び絵本について述べていく。

①制作（製作）・造形遊びについて

画用紙や空き箱などを使い形があるものや遊び道具として個人で取り組む遊びについては、モノの特性を活かして表現しながら、その過程を楽しみながら黙々と取り組む遊部である。また、様々な素材の持つ特徴や表現の仕方に気づきながら表現する喜びを味わい、意欲をもって取り組む行動が豊かな感性と表現に繋がっている。工夫しながら完成を目指して取り組むことから、思考力の芽生えも期待される。行事ごとでの

制作活動においては、社会生活との関わりとの中で興味が広がっていき、遊びの中に必要な情報を取り入れ、情報に基づいて判断したり、活用したりしながら取り組んでいくことにも繋がっていきと考えられる。

②絵本を読む

保育者や保護者に読んでもらう機会の多い絵本であるが、自分で手に取り、自分のお気に入りとしていつもそばに置くことのできる安心のアイテムの1つだと考えられる。文字は読めなくとも、読んでもらった時の感動や嬉しさがその1冊に詰まっているからである。言語表現の響きで自然と耳から言葉が入り、ページをめくるごとに「お話しの世界」に入り込む。大人が絵本を読もうとすると、子どもは先のページに進めたり元に戻って同じページを何度も見返したりすることがある。また、絵本を読む大人の顔や口元をじっと見ることがある。同じ絵本を何度も読むように持つこともある。保育者が子どもたちに読み聞かせをしている時、一つのストーリーであっても子どもは各々の世界に浸っているのである。大好きになった絵本は何度も読んでもらっているうちに覚えてしまい、大人が読むのに合わせて口ずさむようになる。文字に興味を持つようになると、自分や身近な人の文字を見つけて指さしてみたり、大人と一緒に読んだりする。このようにして大人から読んでもらった経験を重ねた子どもは、徐々に自分一人で絵本を読むようになる。

子どもにとっては、言葉による伝え合いを絵本の登場人物と行っていると思われる。数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚も視覚、聴覚を使い、比較したり、大きな「つ」と小さな「っ」の発する音の違いを発見したりするなど文字の使い方も習得できると思われる。

③お絵かき（描画遊び）について

子どもがお絵かきをしている時は、周りが見えなくなるくらい夢中になって自分の世界に入り込むことがある。そのとき、頭の中では想像力と発想力をフルに使って、どこに何を描くのか、何を使って描くのかなど自分らしい表現で絵を描こうとしているのではないだろうか。年齢によっては、表現力や想像力を養うだけでなく、自分の名前を書く・文字を書くことにも繋

がる。お絵かきは、指先を使うことで、脳神経が刺激されて知能の発達に効果が期待できると考えられる。指に力を入れて濃く色を塗ったり、軽く持って薄く描いたりするなど、力加減を覚えるようになる。ここでは、思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、豊かな感性と表現があてはまると考えられる。一人で黙々と取り組む内容においては、制作・造形遊びにも似たものがある。年中になると絵の具を2色・3色を混ぜるとどんな色になるかなという混合色を作ってお絵かきをするようになったり、偶然混ざった色から新しい色を発見したりすることも子どもの豊かな感性と表現へと繋がっていく。

④スクーター遊び

一人で園庭を走り回る遊びであるスクーター遊びには、外見からは一人黙々と走り回っていると映るが、この遊びには健康な心と体…右足と左足の力の入れ具合を調整しながら体を使い、スピードやハンドルを動かしながら方向を定めていくことにより元気いっぱい体力を使っている。言葉による伝え合い…自分が使っているスクーターを友達が「貸して」と言ってきた際には、自分の言葉で「今使っているから後で」や「いいよ、また後で返してね」などと言う子どもがいる一方で、すべての子どもが自分の意思を相手に自分の気持ちを表現できるかといえばそうではない。断りたいときの「どういったらいいかな」と考えながら、保育者に助けを求めてくる子どももいるであろう。しかし自分の言葉で相手に伝えることができたときに自信となり自立心が養われていく。同時に順番になるまで待つ、友達と園にある遊具を共有するといった道徳性・規範意識の芽生えが養われると考えられる。どの様にすれば友達も自分も気持ちよく遊ぶことができるのかを考え、社会生活との関わりを学ぶことになる。衝突せずに自分の今の状態や考えを伝えることを学ぶことができる。

IV. 遊びから学びへ

本論では、今回の改定で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と遊びの関連について述べていったが、これらの10の姿は到達目標ではなく、ま

た年長になったら必ず見られるようになるものでもない。乳児期からの保育においてそれぞれの時期にふさわしい発達を促す援助を行うことに留意して保育を行う必要がある。前節に示したように、個人遊び・集団遊びともに、それぞれの遊びの中には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中にある子どもの育ちが複数含まれているということがわかる。同じ遊びでも年齢により遊び方や遊びの展開の仕方、他者との関わり方は異なる。両方の遊びに共通することは、子どもの遊びは、遊んでいるうちに様々な学びの小さな階段を昇っていくということである。学ぼうとして遊んでいるわけではなく、遊んでいるうちに知識として、生活の知恵として子どもの中に育っていくものである。それら遊びの中で、他者との関わり、保育者との関わりにより、遊びの内容が深まっていったり、遊びという活動を展開させたりしていきながら子どもの成長が成り立っているのである。

V. まとめ

乳幼児期の遊びは“学ぶ”ことが目的ではなく、“遊ぶ”という時間が充実する中で子ども自身の経験や体験が積み重ねられることによって、自然と学びつまり発達を促す遊びへと繋がっているものである。

遊びにおける充実した体験は、子どもに満足感を与え、自己肯定感を高め、物事に対する意欲の高まりにつながる。それによって個々の子ども及び周りの子ども達の成長に繋がるのである。発達を促すという観点から考えると、遊びが充実することが第1のポイントなのである。保育者の援助は、子どもの遊びを見守り、参加しながら、充実した遊びによって子ども達が何を獲得し、学びの芽生えとしての小さな一歩となる成長を考えることである。保育者が乳幼児に対して「こうあって欲しい」、「この面を伸ばしていきたい」と考えながら、子どもがその遊びを好きになり、関わりたいと思えることがすべての領域にまたがる発達へと繋がる遊びになる。それは、子ども達が積極的に関わり、または関わっている遊びを認めることから始まると思われる。無藤(2013)は、遊びに関して「真剣な対峙」として物への対峙が一層遊びを活発化させ、子どもの成長に繋がるとある。「対峙」という言葉を使

うと、難しく考えてしまうが、遊びそのものを一生懸命に行うこととして述べている。また、これらに加えるとすると、「承認の積み重ね」と考える。できた体験、楽しかった体験が大人や保育者により「すごいね」「楽しいね」「上手ね」と認められることの積み重ねにより、遊びが楽しくも深くなると思われる。

今後、実際に保育現場における実際の遊び場面から、子どもの「遊び」がどのように発展しているか調査を試みることによって、「遊び」の中にみられる「学び」とはどのようなものであるかを具体的に明らかにしたい。

引用文献

- 1) 今井和子 (2013) 遊びこそ豊かな学び, ひとなる書房 ,p33.
- 2) 村野智康 (2015) 「自分たちでルールを工夫し継続する遊び」の割合～4・5歳児の自由遊びの観察から ,pp83-100.

- 3) 伊藤茂美・嶋守さやか・上村昌 (2020) 幼児期における主体的・対話的で深い学びに関する一考察－幼児期の教育における見方・考え方との関連性から, 桜花学園大学保育学部研究紀要第21号 ,pp.157-178.
- 4) 幼稚園教育要領 (平成29年告示) 文部科学省.
- 5) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (平成29年告示) .
- 6) 保育所保育指針 (平成29年告示), 厚生労働省.
- 7) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説書, フレーベル館 ,P34.

参考文献

- ・ 文部科学省 (昭和39年告示) 幼稚園教育要領.
- ・ 幼稚園教育要領 (平成元年告示) 文部科学省.
- ・ 無藤隆 (2013) 幼児教育のデザイン, 東京大学出版.

